

# 馬はどのように渡来し、社会に浸透したのか

馬文化の渡来、生産・飼育、交通、祭祀、儀式——

古墳時代から摂関期まで、日本考古学・文献史学を中心に、  
動物考古学、日本文学など、隣接する諸分野と多角的に検証

# 馬と古代社会

佐々木虔一・川尻秋生・黒濟和彦 編

(古代交通研究会会長) (早稲田大学教授) (大成エンジニアリング(株))

2021年5月25日刊行 定価 8,800円 (本体 8,000円+税 10%)

A5判・上製・カバー装・568頁+カラー口絵8頁 ISBN978-4-8406-2247-9 C3021 ¥8000E

## ① 馬文化の渡来に迫る

古墳時代、東アジアを經由して日本(倭)に渡来した馬文化。馬は古代社会にどのように受容され広がったのか。中国・朝鮮半島・中央アジアなどの馬文化と比較し、日本国内の古墳などに埋葬される馬具・埴輪、地中から出土する馬の骨など、多彩な資料を分析した最新の研究を紹介。

## ② 日本全国を網羅

中国の制度や朝鮮半島のあり方を強く意識しつつ、生駒山麓西側周辺から伊奈谷(長野県)を経て、上野地域を見通す馬の伝播の道、畿内周辺の牧、そして御牧が設置された信濃・上野・甲斐・武蔵地域、さらには北陸・東北、九州南部まで、日本列島の馬に関するほぼ主要な地域をカバー。その地域の専門家が最新の研究成果を伝える。

## ③ 古墳時代中期から摂関期までの約700年間

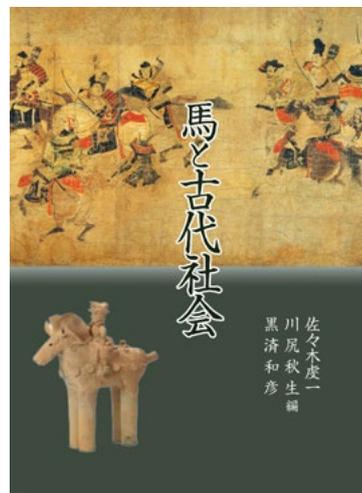
初期馬飼集団が出現した古墳時代中期からはじまって、馬が武力として積極的に利用された古墳時代全般、大化前代から律令制成立期の諸制度の成立、そして律令制下の牧の実態、貴族と馬の儀礼的な関係が強まった摂関期まで約700年間を対象とする。

## ④ 古代社会を支えた馬の諸相

白馬あおうまの節会(毎年正月7日に実施)など儀式に登場する馬。雨乞の祭祀に用いられる馬。神社に奉納される絵馬。和歌によまれた馬、騎馬と馬車の関係など、様々なシーンに登場する馬が古代社会にもたらした意味を多角的に考える。

## ⑤ 馬の一生

馬はどこからやってきて、何を食べ、何歳まで生きたのか。地中から出土する馬の骨などを分析する動物考古学の最新成果により、都城やその周辺の馬の一生(ライフヒストリー)や馬の出生地、そして労働環境までを明らかに。カラー口絵8ページで、馬の文物を紹介。



八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8  
Tel:03-3291-2961 / Fax:03-3291-6300  
pub@books-yagi.co.jp <https://catalogue.books-yagi.co.jp/>





出土した鞍馬 (日笠フシダ遺跡・奈良県立橿原考古学研究所提供)



復原鞍馬 (日笠フシダ遺跡・奈良県立橿原考古学研究所提供)

2006年に奈良市の日笠フシダ遺跡で、「天平十年(738)」銘木簡とともに出土した鞍馬3点のうちの一つ。縦19.9cm、横27.8cm。色彩は失われていたが、赤外線分析で連続羊毛の馬(アサマ)の繻馬と判明し、唐の壁画や我が国の中世絵巻を参考にその色彩が断定復原された。



エミンが使用した轡 (岩手県二戸市諏訪前遺跡出土・二戸市教育委員会提供)  
轡は馬の口に嵌め、手綱に繋ぎ馬を制御する道具である。口の中に入れる銜、前後に取り付ける立間に続く銜板、手綱を付ける引手からなる。エミンの居住域である東北北部に限り分布する振りあり二条轡引手の風状銜板付轡は、銜板の平面形に多少差異があるものの、引手の特徴は共通する。



埋葬された馬の骨 (山梨県南アルプス市百々遺跡出土・山梨県立考古博物館提供)  
百々遺跡は、前鳥居川扇状地中央部にある平安時代の大集落遺跡で、馬は楕円形の土坑から検出された(9世紀後半以降)。いずれも頭を北、顔を西に向けていることから、浄土信仰により手厚く葬られたらしい。

本書に登場する遺跡 (抜粋)

【海外の遺跡】

- 天安斗井洞遺跡・福泉洞10号墳・金海大成洞68号墳・松鶴洞1号墳・東萊福泉洞38号墳(大韓民国)
- 徳興里古墳(北朝鮮)
- 喇嘛洞墓墳墓群(中国)
- ズヴォリャノヴォ古墳(ブルガリア)
- ソリュートレ遺跡(フランス)



## 出土した絵馬



図1 主な出土絵馬 (いずれも報告書より転載)  
※ただし、十里町遺跡出土絵馬は長浜市より提供

## 出土した動物遺体から馬の一生を再現

I部 総論

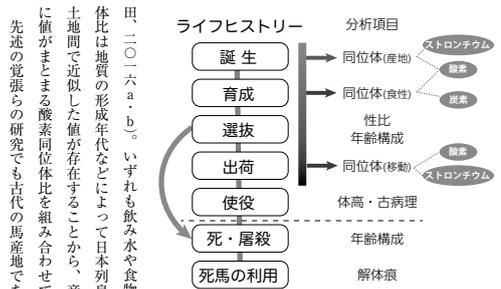


図1 馬の一生と動物考古学的分析項目

に馬の一生を復元することが可能となってきた(図1)。同位体分析や古病理学的分析などこうした新たな手法について解説するのが本稿のもう一つの目的である。

一 産地と移動

同位体分析の導入は近年の馬遺体研究に大きな進展をもたらした。その第一の成果は馬の産地と移動に関することである。馬がどこで生まれ、成長したのかに関する情報と、出土地の情報を組み合わせることで、馬の移動を明らかにすることが可能となった(覚張、二〇一四)。古代では藤原宮跡出土馬に中部地方内陸部産の馬が存在することが明らかにされた。詳細については本書II部3を参照。そこで用いられたのは馬術・エナメル質のストロンチウム同位体と酸素同位体分析である(覚張・米田、二〇一六a・b)。いずれも飲み水や食物(草)に由来し、摂取した土地の値を反映する。ストロンチウム同位体比は地質の形成年代などによって日本列島内でも多様な値を示し、解像度が高い。一方で、列島内の遠く離れた土地間で近似した値が存在することから、産地の特定が難しいとされる。そこで、気温や高度に応じてより広域的に値がまとまる酸素同位体比を組み合わせて、長距離移動の有無が検討されたのである。

## 馬は何歳まで生きたのか

6 動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用 (植月)

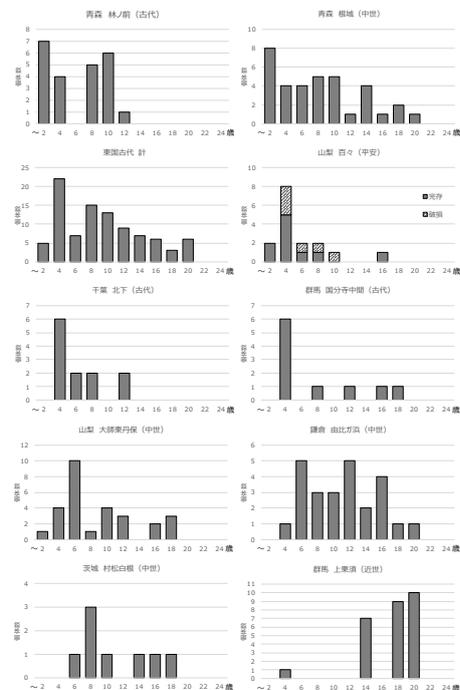


図9 ウマ推定死亡年齢分布  
(植月2013、植月は2020より作成。ただし、百々、大師東丹保については個体単位で再集計した)

## ヒトの足跡と馬蹄跡からヒトが馬を引く様子を再現

6 馬の飼育 (杉山)

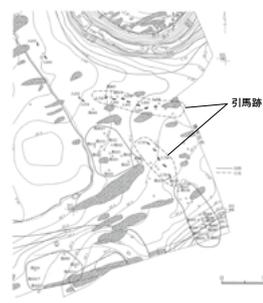


図4 金井東裏遺跡屋敷地外ヒト足跡・馬蹄跡・引馬跡

を歩く足跡・蹄跡が明瞭にできることが分かった。このヒト足跡・馬蹄跡の発見により、今まで足跡や蹄跡が確認できた水田や、蹄跡が確認できたH r i F P下の牧の地帯以外でも確認できなかった屋敷地、道などから足跡・馬蹄跡が確認でき、当時の人・馬の行動が良く分かるようになった。

金井東裏遺跡の調査で明らかになったH r i F A中のS2上面を踏み込んだ馬蹄跡から馬の動きをみても、道はすべてが火山灰に覆われるが、その中で特定の道のみを選択して歩いている。馬は、人と一緒に歩く引馬を示しているものが三ヶ所、馬単独で歩いているか騎乗している可能性のあるものが二ヶ所ある。他に馬蹄跡が少なく状況はつきりしないものが二ヶ所ある。

屋敷地内部には、二ヶ所より馬蹄跡が確認できた(蹄長九・五〜一四・五cm)。出入口に二個、東南部のやや低く窪んでいる箇所(五世紀後半の竪穴建物で埋没した箇所の手前)に七個である。屋敷地内部に馬がいることは確認できた。屋敷地内の施設で馬関連施設は調査範囲内では確認できない。屋敷地でのヒト足跡は九〇以上検出された。

引馬の例として、屋敷地を出た東側の二号墳南側南側すぐのところに、東から西へ屋敷地に向かって歩いている。ヒト足跡は七個で、足長は三・五〜五・五cmで二四cmを中心とした足長を持つ人物である。並行して出土した馬蹄跡は五個で径二・五〜三・〇cmを中心としている。馬蹄跡とヒト足跡の大きさからみると、成体で、大人が引

